

「東京国際福祉機器展での活動報告」

(朝日ゼミ班)

はじめに

私は、地域のまちづくりをフィールドワークとして行っている朝日ゼミの活動に興味を持ち、その活動の一部に参加することで、岡ゼミでの活動をより有意義なものにしようと考えた。今回の活動報告は、朝日ゼミ内の活動の一環として行われた東京国際福祉機器展視察合宿に同行し、自分なりの視点からまとめたものである。

1. 活動先の紹介

国際福祉機器展とは、東京国際展示場（通称：東京ビックサイト）において2005年度から毎年、開催されている。世界の福祉機器を総合展示と言うことで、ハンドメイドの自助具から最先端技術を活用した福祉車両まで世界の福祉機器を一堂に集めた国際展示会である。保健医療・福祉・介護の各分野の改正革命や事業活動を紹介する国際シンポジウム、セミナー情報など国際福祉機器展 H.C.R に関する最新情報を掲載している。

以下では、2005年度に開催された国際福祉機器展の規模やセミナー内容などの概要から国際福祉機器展の全容を紹介する。

開催初日に全国社会福祉協議会の会長である長尾立子さんの開会宣言で3日間の幕を開けたのである。引き続き行われた「くす玉」オープンにより H.C.R 2005 は開場したのである。「世界の福祉機器、有明に大集合」との合言葉のもと、国内562社、海外16ヶ国68社の参加により、25,000点にもものぼる福祉機器が展示された。3日間の述べ来場者数は135,825人であった。多くの来場者が機器を実際に試用し、熱心に出展社と相談する姿が会場のあちらこちらで見られたのである。

特別企画も多彩に開催され、新企画「子どもの広場」が特設された。新企画・展示として特設された「子どもの広場」では、親子が参加して試せる子ども向けの福祉機器が総合展示された。車いすや日常生活用品の他に学習機器やコミュニケーション機器なども展示された。同広場では相談コーナーを設け、無料で福祉機器に関する相談や療育相談、教育相談も行われた。さらに簡単、おいしい、特別講習「高齢者の食を考える」の開催も行われている。日々の暮らしに楽しみや豊かさをもたらす「食」について、特別講習をおこなったものである。一流ホテルの料理長による「おいしく、簡単につくれ、美しい食事」をテーマに朝昼晩の一日の献立とそのレシピ、調理のポイントの紹介も行われ、大いに賑わった。また、栄養士から糖尿病や高血圧の方に対するアドバイスも行われていた。東京国際展示場のレセプションホールでは、前年に大好評であった特別セミナー「福祉機器の選び方・使い方」開催したのである。それは8つのテーマ毎に専門家が「利用する方に合った福祉機器の選び方」「福祉機器の効果的な正しい使い方」を分かり易く解説したものであり、ケアマネージャ必見のものであった。参加は、無料であり、「ベッド」と「福祉車両」

の選び方・使い方についても専門家がわかり易く解説を行った。すぐに役立つ、プロに役立つ「出展社ワークショップ／セミナー」は60本のプログラムで構成されそれぞれ最新福祉機器情報を提供した。

2日目の国際シンポジウムは約1,000人の参加があった。国際シンポジウム「高齢者リハビリテーションの方向」は満席となり、介護保険制度の改正で注目が集まる高齢者の自立支援、介護予防についてドイツ、オランダ、デンマークのヨーロッパ3か国から招いた講師による各国の高齢者リハビリテーションの現状と課題についての講演は参加者の多くに新たな知見を与えた。その講演を受け、チューターの石神重信氏（日本リハビリテーション医学会常任理事）が代表質問に立ち、医療、介護福祉におけるリハビリの役割とその理解を深めるところとなった。

開催2日目のそう来場者数は、49,000人であった。朝から大勢の来場者が会場入り口に並び、午前10時の開場直後から会場内が混雑するという大盛況であった。また、各展示ブースを熱心に回る来場者に、出展社のスタッフは休みもとらずに説明を行うという熱気に溢れた光景が広がっていた。「子どもの広場」では、子どもたちの声がこころよく響いていたのである。福祉機器の選び方・使い方の特別セミナーは前日に引き続き高い関心を持たれていた。2日目は、約1,500人の参加者を迎え「入浴」、「おむつ・排泄用品」、「住宅改修」について解説が行われた。利用する方への適合や、安全な介助の方法、福祉の仕事をする方々が留意すべきポイントなどについて説明が行われた。

このような注目の中、最終的には3日間で述べ13万人の来場者を迎えた日本最大の福祉機器展が閉幕した。

以降は、2005年度の成果をさらに進化させながら今年2009年には第36回目となる国際福祉機器展が東京国際展示場で開催されている。以

2. 当初の活動目的と目標

この活動の私の当初の目的は、11月に行われる福祉住環境コーディネーター検定試験の勉強の一環として捉えていた。多くの福祉機器を実際に目の当たりにすることで、福祉機器はどのように造られているのかを知り、そして高齢者・障害者などの人々と接する中でそのような課題があるのかを探り、福祉機器とそれらを取り巻く現在の環境をさまざまな角度から学ぼうと考えていた。

活動の目標としては、当然ながら自分自身で見て、体験し感じたこと、疑問に思ったことは会場で聞き、福祉住環境コーディネーター検定試験で成果を発揮することにあつた。

3. 自分たちの活動内容

今年で第36回を迎える国際福祉機器展（H.C.R2009）は、2009年9月29日（火）～10月1日（木）の3日間開催された。私は10月2日（木）に東京福祉機器展の視察を行った。会場での展示ホールは大きなホール2か所に別れていたのもそれぞれ午前中と午後で見ることにした。

東京国際福祉機器展では、移動機器・福祉車両・ベッド用品・トイレ用品・入浴用品・日用生活用品・建築、住宅設備など2万点を超える福祉機器が展示されていた。15か国・1地域から491社・団体が出展をした。その中には、H.C.R2009国際シンポジウムや福祉のスキルアップ講座など特別企画も行われていた。

午前中は、自分が興味を持っているシャワーベッドである。祖父が入退院を繰り返していて中々動くことができないので入浴用品に注目していたのである。自分が、パラテクノ社の方に直接シャワーベッドについて聞いたので印象に残っている。シャワーベッドの中に入ることはできなかったが、手を入れるところがあったので少しだけ体験することができた。他には、トイレ用品・ベッド用品・おむつ用品・コミュニケーション機器・日常生活用品・介護予防機器などを見ることができた。

午後は、立位可能な車いすに試乗する体験をした。他には、福祉車両に乗る体験と言った様々な体験を自分からしていった。防災用具・施設用設備用品・リハビリ機器などを見ることができた。

午前中と午後で、たくさんの福祉機器を目にした。今回の活動では、利用者さんの気持ちや販売者の熱意などを知ることができ自分自身、大きな得るものがあったと確信している。

4. 活動における問題点・課題

活動会場における問題点は、来客者では、学生からサラリーマンや就職活動の人など様々な人々がいたが、車椅子の方々も印象的に残っている。車椅子を貸出するコーナーがあったことは大変良かったのだが、車いす使用者が利用するエレベーターが混雑していたのが目立っていた。とても欲しいシャワーベッドなのだが、高いので約900万円、安いもので約300万円から400万円という説明であった。大規模な病院や福祉施設では購入することも可能だと思うが、個人では買うのはとても難しい価格である。福祉車両に乗った体験だが、乗り心地やスペースなど良い点もあったのだが車いすに乗ったまま中に入ると時にリフトが軽くフラついた時があった。

活動会場における課題は、会場内のエレベーターの件を改善して全ての人々が快適に見に来られるともっと良くなると思う。シャワーベッドの件は、個人での購入も可能な価格となるような技術の進歩を期待したい。そして、1人でも多くの人々に快適な入浴を体感してもらいたい。福祉車両の件は、リフトアップ時にグラつくところの固定方式を改善することが課題である。

このように、様々な問題点・課題が今後どのような形で福祉機器として登場するのがとても気になる場所である。

5. 結論 活動を通して学んだこと、理解したこと、成長したこと

結論活動を通して学んだことは、やはり一番印象に残っているシャワーベッドの事である。シャワーの水圧の強さは変えられないが、肌にあたって痛くなくちょうどいい感じ

である。シャワーの温度だが、適温は40℃で37℃から43℃まで設定することができる。販売者は、利用者の事をまず第一に考えていると言うことがよく伝わってきた。相手の気持ちになって考えると言うことを学ぶことができたのである。

結論として活動を通して理解したことは、シャワーベッドの心臓近くの部分は、シャワーの強さは弱いので安全性がとても理解できた。立つだけの車いすは、初めは理解できなかった。立つだけで何の意味があるのだと思ったからである。しかし、体験をして利用者が普通の人と同じ目線で会話をしたいという気持ちが理解できた。様々な福祉機器を体験して、利用者の気持ちを理解することができたのである。

結論活動を通して成長したことは、今まで福祉機器に対してほとんど考えることはなかった。しかし、祖父の入退院があり少しずつ福祉機器について興味を持っていた時、東京国際福祉機器展に行くことになったのである。活動を通して、福祉機器に関心を持つようになった。福祉機器に目を向けて祖父にとって何が必要なのだろうか、祖父は何を求めているのだろうか考えるようになった。また、販売者の人に話を伺ったこともある。自分自ら話を聞きに行くと言うことはとても勇気のいることである。疑問に思ったことを聞きに行くと言うことは、今まで生きてきた中でできなかったことなので自分自身成長できたと思う。今後も今回の経験を生かしていきたいと強く決意したのである。

6. 活動先への提案

このような規模の国際福祉機器展を東京だけにとどまらず大阪・名古屋・福岡・札幌など様々な箇所で行うことで高齢者、障害者、福祉関係者の多くがより良い福祉機器を選択することができるようになる。現在も大阪、名古屋などで開催されてはいるが規模が全く異なる。そうすることによって、今まで以上に多くの人々が足を運び、長時間の移動が困難な高齢者や障害者が直接最新の福祉機器に触れることができる。

また、開催会場の設備管理を見直したほうが良いと思う。特にエレベーター、エスカレーターの利用方法やトイレの数・広さ・位置などである。来場者がスムーズに見学できる環境が望ましいと思う。

7. 2010年度に活動する学生へ

東京国際福祉機器展では、たくさんの体験をすることができる。出展ブースのスタッフが気軽に声をかけてくれることもあり福祉機器試乗や体験もスムーズにできる。利用者さん、販売者の方と話をする機会も多くあると思う。普段の生活では味わうことのできない体験をすることができる。貴重な体験をすることは、その後の学生生活において非常に大きな経験になると思う。誰しも、福祉機器を使う時が来る。その時のためにも、最先端の情報や技術を学ぶ必要があると思う。一つの会場の中で、学ぶ場が本当にたくさんあると言うことは、言い換えれば楽しみがたくさんあると言うことである。従って、とても充実した活動を行うことができる。そのためには、事前に自分なりの考えを持ち、この活動に取り組んでいって欲しい。